

福島県の歴史像 — 交錯・衝突・交流からみる狭間の地域 —

常任委員 会
第七五回（福島）大会実行委員会

地方史研究協議会は、第七五回大会を二〇二五年一〇月一八日（土）・一九日（日）の二日間、福島県郡山市のけんしん郡山文化センターで開催する。本会常任委員会および地元の研究者を中心に組織された大会実行委員会は、大会の共通論題を「福島県の歴史像 — 交錯・衝突・交流からみる狭間の地域 —」と決定した。本大会は、福島県で開催する初めての大会であり、福島県の全域を対象とする。

福島県は、巨視的に見れば東北の最南端に位置しており、気候や言語などに北関東との共通性も多くみられ、東北と関東の狭間の地域といえる。福島県の人々は関東に親和性を感じ、「東北でありながら東北にあらず」という実感を抱いている人もいる。古代に常陸国の一部が陸奥国に編入され、近代に陸奥国が五国に分割された時、福島県域の岩代国・磐城国には他の三国と異なり「陸」の字がついていないように、狭間の地域であるが故、揺らぎを持っているのである。そのため、政治権力が交錯する舞台となり、数多くの軍事的衝突が生じたが、人・モノ・文化の交流が起こる場所ともなった。

従来、福島県の歴史を考える際、東北と関東を結ぶ交通路で結ばれた人・モノ・文化の交流といった南北の視点が注目されてきた。しかし、福島県域は、新潟県域との関わりも深く、同地を通じて入手した日本海の素材を郷土料理や年中行事に取り入れるとともに、会津で生産されたからむしが越後縮の素材となるなど交流もみられる。そして、新潟県域から日本海を通じて北陸・上方へ広がる東西交流へと展開していった。そこで、今大会では、こうした東西という新視角も取り入れたい。また、福島県は戊辰戦争をはじめとする中央との衝突における「敗北」のイメージが色濃く、そうした歴史に焦点が当たることが多かった。しかし、「敗北」にとらわれ、その他の豊かな歴史を捨象することがあってはならない。一口に福島県といっても、東から浜通り、中通り、会津という三地域に区分され、それぞれの地域が独自性を持つ豊かな歴史を紡いできたのである。こうした点に留意しながら、本大会では、他地域との交錯・衝突・交流の中で育まれてきた三地域それぞれの個性や共通性に迫り、そのうえで総体としての福島県の新たな歴史像を描くことを目指す。その前提として、時代順に福島県の歴史を概観してみよう。

縄文時代には、越後・北陸や北関東との交流を示す痕跡が見られる。古墳時代には、東北最古の前方後円墳が会津で築かれ、いち早くヤマト王権の影響を受けていたことがわかる。七世紀になると陸奥国が設置され、関東や中部地方などから移民が入植し、蝦夷との

衝突の舞台に送り込まれていった。相馬地方をはじめとして、官衙が主導する製鉄が行われ、武器の原料となったが、在地社会においてこうした製鉄技術は次第に内陸部へ伝播していった。

平安時代末、福島県域を影響下においていた平泉藤原氏が奥州合戦で源氏と衝突し滅亡すると、岩城氏など一部を除いて領主層が一変し、千葉（相馬）氏や三浦（蘆名）氏などの関東御家人が新たに入部する。室町時代には、鎌倉公方が奥州支配強化のため実弟二人を稲村と篠川に派遣したが、京都の將軍家と通じた伊達氏や蘆名氏が反乱を起こした。戦国期には、常陸国から進出してきた佐竹氏の影響下に入る領主が増えた。一方で、伊達氏や田村氏のようにこれと対立する領主もあり、さまざまな領主の勢力が交錯した。

織豊期には織田・豊臣政権への対応をめぐって、諸領主はそれぞれ独自の動きを見せる。しかし奥羽仕置・再仕置、そして、江戸幕府が成立すると、中世以来の領主層は相馬氏を残して姿を消した。近世の福島県域は、会津藩領のような領国があると同時に、幕領・諸藩領などが錯綜する非領国地域もあり、その下で社会も多様な展開をみせた。江戸とつながる南北の街道が物流の大動脈となり、福島県域は東北と関東の人々が行きかう結節点・通過点となるが、同時に県域内地域間を結ぶ東西の陸路や舟運も発達し、太平洋と内陸部との交流、阿賀川舟運を通じた越後、上方との交流も盛んになった。近世中後期には江戸や上方からの技術伝播や文化交流が顕著に見られた。一方、養蚕に関する技術などは、福島県域から全国へ発信され、養蚕業の発展に多大な影響を与えた。

戊辰戦争では、諸藩の立場が交錯し、福島県域が衝突の舞台となり、多くの悲劇が生まれた。そして、会津藩をはじめとする敗北諸藩への処罰の結果、支配体制が再び大きく変わることになり、廃藩置県を経て若松県・福島県・磐前県が成立し、明治九年（一八七六）に福島県として一つにまとまることになる。福島県では、自由民権運動が萌芽し、新政府は福島県の開発を強引に推し進め、いわゆる激化事件へとつながった。一方で、安積開拓のように比較的順調に開発が進んだ地域もあった。その後、鉄道が敷設されると、東京への労働力や物資の供給地としての役割が確立された。そうした役割はさらに、東北振興策により強化されていった。安積疏水事業から派生した沼上発電所の設置が端緒となり、福島県は関東への電力供給地としても位置付けられていった。東日本大震災に伴う東京電力福島第一原子力発電所事故が福島県に大きな被害をもたらした。その影響は現在も深刻だが、人々が地域の歴史を見直す契機ともなった。

福島県域は、度々政治的に交錯し、東北と中央の衝突の舞台となったが、福島県の人々は翻弄されるだけの存在ではなく、時には中央政権を利用するしたたかな側面を持つ。また、南北のみならず、東西にも広がる多様な地域との交流を通じて豊かな経済・文化を築いてきた。こうした交錯・衝突・交流が狭間の地域である福島の特徴を生み出すことになったのである。

各地から多くの参加者を得て、さまざまな視点から活発な議論が交わされることを期待したい。